

外務大臣

外務大臣田代三喜右衛門

外務大臣田代三喜右衛門

明治二十九年五月十二日

無効

外務大臣田代三喜右衛門
外務大臣田代三喜右衛門
外務大臣田代三喜右衛門
外務大臣田代三喜右衛門
外務大臣田代三喜右衛門

外務大臣



外務大臣

廿九



外務大臣上奏昨年十月八日朝鮮事變
ノ公報ト稱スル書類ニ関シ京城駐在一
等領事内田定樞報告

右謹テ御覽ニ供ス

明治二十九年五月十九日

内閣總理大臣侯爵伊藤博文

閣

外乙一九三

明治廿九年五月十五日

内閣書記官



内閣總理大臣 **大寺** 内閣書記官長 **其**

外務大臣上奏昨年十月八日朝鮮事変、
公報ト稱スル書類ニ関シ京城駐在一等領
事内田定槌報告

昨二十八年十月八日朝鮮國京城ニ於ケル事變ニ
關シ今回法部協辦ヨリ法部大臣へ提出シタル
公報ナリト稱シ去ル三月中刊行ニ係ル「ゼゴリアン
レボジットリ」雜誌(朝鮮京城ニ刊行ノ英文雜誌)所
載ノ件ニ付京城駐在一等領事内田定植ヨリ別
紙寫ノ通報告致越候ニ付此段謹テ奏ス

明治二十九年五月十五日

外務大臣伯爵陸奥宗光



外務省

昨年十月八日事變ノ公報ト稱ス
ル書類進達ノ件

去ル二月十一日事變後當國政府ニ於テハ
昨年十月八日事變ニ關係ノ嫌疑アル人々ヲ
逮捕シ審問致居候趣ハ去月十八日公信
第七八號中ニ具報致置候處 爾來其筋
ニ於テハ未タ審問ノ結果ヲ公然發表不
致候得共當地ニ於テ米國宣教師等ノ

發行致居候 *The Korean Repository* ト稱スル雜誌ニ
シテ去ル三月中刊行致候紙上ニ該件ニ関
シ此度法部協辦ヨリ法部大臣へ提出シタル
公報ナリト稱シ英文ヲ以テ記載セルモノ有
之候ニ付該誌一部邦語譯文ヲ相添別紙之
通り及進達候間御一覽相成度候右ハ昨年
十月八日事變ニ関スル報告書ナリト稱スル
モ畢竟去ル二月十一日大君主陛下カ露國公
使館ニ臨御セラレタル所以ヲ説明スルノ目
的ニ出タルモノ、如ク且ツ其筆法及体裁ヨ

リ察スルニ右ハ當國官吏ノ起草セルモノニ
アラスシテ本件ノ取調ニ參與セル米國人
「グレートハウス」ノ手ニ成リタルモノト相見候
該報告書中ニハ本邦人ノ所業ニ関スル記事
少カラス候ニ付為御參考此段及具報候
敬具

明治二十九年四月十三日

在京城

一等領事 内田定槌

外務次官原敬殿

夕
夕
夕

社説

王妃ノ死ニ関スル再調査

法部協辦ヨリ法部大臣ニ差出シタル報告
書ハ頗ル注意スベキモノアルヲ以テ我輩ハ
今茲ニ其全文ヲ掲載ス嚮ニ國王ハ行為ノ
自由ヲ得タルト同時ニ直キニ王后ノ死ニ関
シ完全ニシテ且公平ナル調査ヲナスベシ
トノ命令ヲ下シ其犯罪ニ関係セル朝鮮
人ヲ逮捕シ其審問ハ今正ニ進行中ナリ

外務省

外國顧問官グレットハウス氏ハ國王陛下ノ
特別ナル委托ニ因リ法度ニ出席シ証人ヲ
取調べ本件ニ関スル審問ヲ監督セリ而シ
テ今ヤ已ニ開庭十五日間ニ涉リ數多ノ証
人ヲ取調べ且ツ本件ニ関スル公文書ノ調
査ヲモ許サレタリ

此報告ハ前内閣ノ下ニ下サレタル裁判判
決書即ハ千嚮ニ朝鮮ノ官報ヨリ去ル一
月中刊行セル本紙ニ轉載シタルモノト相
異セルモノニシテ吾輩ハ前記ノ理由ニ依

リ此報告書コソハ信ヲ措クニ足ルベク此
報告書ニヨリ始メテ王后ガ死去シタル
當時ノ實情ヲ詳ニスルコトヲ得タリト
認ムルモノナリ

去ル十六日我輩ハ彼十月八日事變ノ
當時親衛隊指揮官ノ任ニ在リシ玄興澤
及當時軍服ヲ脱キ棄テ逃走スルコトナ
カリシ壹名ノ士官ニ伴ハレ王后遭難ノ
宮室ヲ一覽スルコトヲ得タリ別紙ハ即
ハ千現場ニ於テ寫取リタル圖面ナリト

ス
廷内ノ地形暴徒ノ侵入セシ諸明ノ位置
及當時兩陛下ガアラセラレシ諸室ノ模
様ヲ一覽スルトキハ憐ムベキ王后ハ到底
之ヲ取圍ミタル兇徒ノ難ヲ避クルコト能
ハザリシヲ察スベキナリ暴徒ハ報告書
ニモ見エル如ク長サ十六呎幅八呎高七呎
ノ小室内ニ王后ヲ追込ミ之ヲ殺害セリ
我輩ガゴグレートハウス氏ヨリ聞ク所ニヨ
レバ今回ノ審問ハ深ク注意ヲ用ヒ公平ニ

行ヒタルモノニシテ少シモ拷問ヲ施サ
ザリシト云フ吾輩ハ佐氏ガ此審問ニ関
係セル間ハ將來トテモ亦其然ルベキヲ
信ス又佐氏以外ノ人ヨリ聞ク所ニヨルモ
今回ノ審問ハ東洋諸國ノ裁判ニ於テ常
ニ見ル所ノ弊害ヲ脱却セルノミナラズ
其取調手續ノ純正潔白ナル其審査
ノ周到完全ナル又總テ正義廉直ニ基
キ恰モ西洋諸國ニ於ケル裁判ノ如ク
ナルハ實ニ此審問ノ顯著ナル所トス

外務省

十月八日ノ事變ニ関スル事項及王
后ノ死去ニ関スル報告書

本官ハ曩キニ昨年十月八月ノ王宮攻撃
事件王后其他ノ殺害事件及ヒ之ニ関連
セル其他ノ事項ヲ取調べ以テ其報告書
ヲ提出スベキノ命ヲ受ケタルニ由リ番求
多クノ証人及書類ヲ取調べ且本件ニ
関與セシ嫌疑アル數多ノ朝鮮人ヲ審
問シ此等ノ人々ニ對シテハ何レモ公平ニ
シテ且ツ充分ナル審問ヲ行ヒタリ詳細

ノ報告書ハ悉皆ノ證據ヲ蒐集シタル
后追ツテ提出スベキモ今取敢ズ極メテ
簡短ニ其概要ヲ報告スベシ

千八百九十四年七月二十三日日清戦争
ノ將サニ開始セントスル時ニ當リ日本
軍隊ハ大島公使ノ命ニヨリ京城ニ於ケ
ル朝鮮王城ヲ占領セシガ當時王城ノ
正門ニ接近セル街路ノ一隅ニ於ケル朝
鮮兵舎モ亦日本兵ノ為ニ占領セラ
レタリ

外務省

此レヨリ先キ王城（王城ハ高サ十五尺乃
至三十五尺ノ墻壁ヲ以テ之ヲ繞ラセ
リ）ノ正門ヲ守レル此等ノ兵舎ハ親軍壯
衛兵ノ用ユル處ナリシガ千八百九十四
年八月中日本兵ハ一旦王城ヨリ引上ゲ
タルモ彼等ハ尚此緊要ナル兵舎ヲ占領
シ以テ今日ニ至ル迄其占領ヲ繼續セ
リ
已ニシテ大島公使ハ召還サレ井上伯之
ニ代リ昨年九月三日三浦氏之ニ代ハリ

テ在京城日本公使館ノ事務ヲ掌レリ
朝鮮ト日本間ニハ初メヨリ戦争アリシニ
非ス兩國政府ノ關係ハ極メテ親密ナリ
ト知ラレタリ日本公使ハ朝鮮ニ對シ大ニ
勢カヲ有シ其勸告ニ由リ政治上及法律上
ニ數多ノ變更ヲ行ヒ朝鮮政府ハ其各部
特ニ軍部警務及法部ニ於テ自ラ其費用
ヲ以テ數多ノ教官及顧問官ヲ聘用セリ
彼ノ十月八月王宮攻撃ノ際ニハ日本兵
之カ先驅ヲナシ日本人ノ所謂壯士ナルモ

ノ多勢之ニ護衛セラレ之ガ助カニヨリ王
宮ニ侵入シ王后ヲ殺害シ其死骸ヲ燒
棄テタリト聞ヘシガ該事變後三浦子
ハ日本政府ヨリ召還サレ金子及在京城
日本公使館附杉村書記官其他四十余名
ノ日本人ハ同事件ニ關與セシ廉ヲ以テ
逮捕セラレ廣島ニ於ケル日本裁判所
ニ於テ審問セラレタリ而ノ右ハ何レモ
正當ノ手續ヲ以テ無罪放免ノ宣告ヲ
受ケタリ

該裁判所ノ判決文ハ發表セラレタリ該
判決文中ニハ數多ノ事實ヲ記載セリ而
ノ本官ハ其判決中ニ記載セル事實ヲ此
報告書ニ轉載スルモ敢テ事實ヲ枉リルノ
嫌ナカルベキヲ以テ左ニ其全文ヲ掲グ

(判決文ハ之ヲ略シテ記載セズ)

茲ニ注目スベキハ日本廣島裁判所ノ判
決文ハ「拂曉ノ頃光化門ヨリ一同王城内ニ
入り直ニ後宮マデ抵リタリト記セシ后
頭ニ事實ヲ記載スルコトヲ止メ「此等ノ

事實アリト雖モ前記ノ被告人中其犯
罪ヲ實行シタルモノアリト認ムベキ証憑十
分ナラズト記載セリ

今ヤ本官ハ此報告書ヲ完備ナラシムル
為ノ談判決文中ニ漏レタル事實ヲ補ヒ
一同ガ後宮へ達シタル后如何ナル事ヲ行ヒ
タル歟ヲ報告スベキ迷惑ナル任務ヲ有セ
リ

王宮内ノ地面ハ廣濶ニシテ幾多ノ工
クニ直リ繞ラヌニ高壁ヲ以テシ此外

壁ノ内ニハ互ニ離隔セル數多ノ家屋
アリ此等ノ家屋ハ各堅固ナル戸鎖リ
ノ門ヲ有スル低壁ヲ以テ之ヲ繞ラセリ
兩陛下ガ御遭難當日ノ御居殿ハ表面ニ
ハ狭小ナル園アリテ正門ヨリ四分ノ一哩ノ距
離ニアリ

日本兵ノ正門ニ入ルヤ俄カニ此御居殿及
ビ其他諸處ニ向テ進行セシガ途中待衛
隊ノ兵士ニ遭ヒ其若干名ヲ殺害セリ待
衛隊ハ之ニ抵抗シタレ氏其力足ラスノ遂

ニ日本兵ノ進行ヲ止ムルコト能ハザリシナ
 リ
 日本人ハ兩陛下ノ御セラレタル宮殿ニ達
 スルヤ其内若干名ハ士官ノ指揮ニ由リ直
 ニ之ヲ取圍ミ國王陛下ノ御居間ヨリ僅々
 數歩ヲ離ル、處ニ配置セラレ宮庭ノ諸
 門ヲ護リ以テ王后陛下ヲ搜索シテ之ヲ
 弑シ奉ラントスル兇謀ヲ企テ彼等ト共
 ニ王城ニ侵入セル壯士其他ノ日本人ヲ保
 護セリ其人數ハ凡ソ三十人許ニシテ壹

名ノ巨魁之ヲ引率シ拔劍ノ儘國王陛下
 下ノ御居間ニ乱入シ後宮ヲ搜索シテ
 手當次第ニ宮女ヲ引ツ捕ヘ其頭髮ヲ攫
 ミ或ハ之ヲ引ズリ廻シ或ハ之ヲ打チ擲リ
 ナガラ王后陛下ノ御所在ヲ究問セリ右
 ハ數多ノ人ルガ目撃セシ所ニシテ當時侍衛
 隊ニ關係セシフサバチン氏モ亦之ヲ實見
 セリ同氏ハ暫時御居殿ノ庭園ニアリテ日
 本士官ガ左所ニ於テ日本兵ヲ指揮シ且ツ
 宮女ノ虐待セラレシ事實ヲ傍觀シ居リ

シカバ佐氏モ亦屢日本人ヨリ王后ノ所
在ヲ尋ネラレタルモ佐氏ハ之ヲ告グル
コト無カリシヨリ此亦其脅迫ニ遭ヒ生
余モ危険ナルニ至レリ氏ノ言フ所ニ由レ
バ日本ノ士官ハ現ニ庭園内ニ在リテ壯士
等ノ暴行ハ一々之ヲ義知シ居リタルノミ
ナラズ壯士等ガ殺戮ヲ行ヒツ・アリシ間
ニ其部下ノ兵ガ宮庭ヲ圍ミ其諸門ヲ護
衛セルヲ義知シ居リシヤ明白ナリ斯クテ
壯士等ハ一々諸室ヲ搜索シタル後王后

陛下ガ或ル一隅ノ室内ニ匿レ居リ給ヒシ
ヲ發見シ直チニ之ヲ捉ヘ其携ヘタル劍
ヲ以テ之ヲ斬リ斃シタリ
此時王后陛下ニハ重傷ヲ受ケ給ヒタルモ直
チニ崩御セラレタルヤ否ヤ分明ナラズ去レ
氏陛下ノ玉体ハ戸板ニ載セ絹布ヲ以テ之
ヲ纏ヒ庭園ニ取出シタリシガ間モナク日
本壯士ノ指圖ニヨリ更ニ附近ノ小林中ニ持
運ヒ之ニ薪ヲ積ミ石油ヲ注ギ火ヲ放ツテ
之ヲ燒キ棄テタリ

王后陛下ノ御遺骸ハ殆ント全ク之ヲ焼失
シ其残りタルハ僅カ数本ノ骨ノミトナリ
又々陛下ヲ殺戮スルノ畏ルベキ任務ヲ
命セラレタル壯士輩ハ其命セラレタル任務
ヲ全クシタルヤ否ヤヲ慥レル為メ数名
ノ宮女ヲ捉ヘ陛下ノ御遺骸ノ許ニ連レ行キ
其果シテ陛下ナルヤ否ヤヲ訊問シ又々日
本人及之ヲ補助セシ朝鮮人ノ逆賊等ハ陛
下ヲ取逃ササル様十分ノ注意ヲ施シタルノ事
實ハ証憑ニヨツテ明瞭ナリトス

文
種
書

去レバ我々が愛敬スル朝鮮國王后陛下
ニシテ且王太子殿下ノ母君タル者ハ前記
ノ次第ニヨリ終ニ殘害ナル御最後ヲ受
ケサセ玉ヒ其御骸ハ斯ル罪惡ノ証跡ヲ
湮滅スル為メ燒キ棄テラレタルモノトス
侍衛隊が追ヒ散サレ日本人が宮中ニ侵入
シテ國王陛下ノ御居間ニ入り込マントスル
際陛下ハ日本人等ノ注意ヲ他ニ向ハシノ成
ルベク王后陛下ヲシテ身ヲ匿サセ玉フカ
又ハ其場ヲ逃レサセ玉ハント欲シ故ラニ内

卜
務
省

殿ヲ出デ、外殿ニ召サレ庭内ニ於ケル日
本人ニハ判然見ラレ得ベキ所ニ立チ玉ヒ
シガ壯士等ハ刀ヲ振ツテ其御居間ニ突入
シ他ノ日本人等モ一旦同所ニ入り再ビ他ノ
室ヘト通り行ケリ其内数名ハ軍服ヲ着
シタル日本士官ナリシ國王陛下ノ傍ラニ
立チタル近習ハ絶ヘズ其陛下ナルヲ告ゲ
知ニセタルニモ拘ハラズ陛下ハ屢不敬ヲ受
ケサセ玉ヒ一名ノ日本人ハ陛下ノ肩ヲ捕ヘ
之ヲ引ズリ又其隣室ニ於テピストルヲ

外
稽
書

放ツモ、アリ数名ノ宮女ハ打チ惱マサ
レ毛髮ヲ攫マレ陛下ノ御面前ニ於テ前
後左右ニ引ズリ廻ハサレタリ當時ノ宮
内大臣李耕植モ亦他ノ室ニ於テ襲撃
セラレ廊下ニ沿フテ僅カニ匍出デシガ此
レ又日本人ノ為ノニ陛下ノ御面前ニ於テ
斬殺セラレタリ王太子殿下モ亦後宮ニ於
テ彼等ノ為メニ捕ヘラレ玉ヒ其冠ヲ裂カ
レ毛髮ヲ攫ミ引廻ハサル、等其他種々ノ
虐待ヲ受ケ玉ヒシガ日本人ハ殿下ニ對シ

小
務
省

外務省

此ノ如キ不敬ヲ加ヘナガラ之ニ向ツテ王
后ノ所在ヲ拷問シ刀ヲ拔テ之ヲ脅迫セ
シモ殿下ニハ格別ノ御負傷モナク前殿へ
御セラル、國王陛下ノ御側へ逃レ行キ玉
ハリ

本件ニ関スル朝鮮人ノ舉動ニ付テハ後段
ニ記載スベシ

十月八日拂曉前國王陛下ニハ正門外ノ
兵舎ニ日本兵ノ増加セラレタルコト并
ニ他ノ警報ヲ聞シ召サレ其事由ヲ尋ネ

玉ヲ為ノ勅使ヲ三浦公使ニ差立テ玉ヒ
シガ其公使館ニ達シタルハ尚早曉ナ
リシニモ拘ハラズ三浦公使始メ杉村書
記官及韓語通譯官等ハ己ニ全ク着服
シテ外出ノ仕度ヲ終ヘ其戶外ニハ三臺
ノ輿ヲ俟タシメアルヲ認メタリ然ルニ三
浦公使ハ勅使ニ對シ予ガ或ル日本佐
官ヨリ聞ク所ニヨレバ彼ノ兵舎内ニ兵員
ヲ増加シタルハ事實ノ由ナレ氏予ハ未タ
其何故ナルヲ知ラズ去ルト語リツ、アリシ

小務省

外務省

間ニ砲聲乍チ王城ノ方面ニ方ツテ起リシ
カバ三浦ハ勅使ニ向ヒ速カニ王宮ニ帰ラルベ
シ予モ亦直チニ参内スベシト告ケタリ
斯クテ三浦子杉村氏及ビ其通譯官ハ直チ
ニ王城ヲ指シテ出テ行キタリシガ王城ニ
到着セシ際ニハ尚ホ日本人ハ王城内ニ止マリ
テ警衛シ王后陛下ヲ殺害セシ壯士及其
他ノ者共モ多ク在所ニ止マリ居リタレ氏
三浦子ノ入城セシ後ハ毫モ殺傷其他ノ
暴行ヲ行フ者ナク且ツ日本ノ壯士等ハ直チ

ニ追拂ハレタリ三浦子ハ宮中ニ到達スル
ヤ直チニ陛下ニ謁見センコトヲ願ヒ出デタリ
シニ陛下ハ之ヲ許サセ玉ヒ佐子ヲ引見ス
ル為メ前述ノ御居室ヲ出テサセ玉ヒ長
安堂ト稱スル隣殿へ入御セラレタリ
此謁見ノ際三浦公使ニ隨行シル者ハ獨リ
杉村氏及ビ通譯官ノミニ止マラズ壯士等
ト共ニ王城ニ乱入シ其巨魁トモ認ムベキ
者ニシテ且ツ現ニ彼等ノ暴行ニ與ツテ
カアリシコトヲ陛下ガ親シク目撃シ王

外務省

ヒシ或ル日本人モ亦其列ニ加ハリ居レリ
而シテ大院君モ亦在處ニ参列シ其席上
ニ於テ三通ノ文書ヲ認メ之ヲ陛下ニ捧呈
シ其御記名ヲ仰キタリ内臺通ニハ商未
一切ノ國務ハ内閣ニ於テ之ヲ處理スベキ
旨ヲ認メ他ノ臺通ニハ大院君ニ隨ヒ王
城ニ入りタル李載冕ヲ擧ゲ僅カ一時計
リ以前ニ殺害サレタル李耕植ニ代リ宮
内大臣ニ任用スルコトヲ認メ尚他ノ一適
ニハ宮内協辦ノ任命ヲ記載セリ而シテ陸

下ニハ悉ク此事ノ文書ニ御記名アラセ
ラレタリ

此時日本兵ハ王城ヨリ引上ゲ朝鮮兵日
本教官ノ訓練シタルミノニシテ訓練
隊ト稱スルモノ之ニ代ツテ王城ヲ守護
衛セリ此日軍部大臣及警務務使モ亦其
職ヲ免セラレ趙義淵ハ之ニ代リ軍部
大臣ニ任セラレ警務務使ノ署理ヲ余セラ
レシガ全月十日ニ至リ權滌鎮ハ警務務使
ニ任セラレタリ此二人ハ何レモ王城襲

撃、兇謀ニ參與シタル者ニシテ二月十一日ノ詔勅ヲ以テ其罪ヲ曝サレ終ニ何ヘカ逃セセル者ナリ

斯クテ朝鮮政府ノ兵權ハ勿論陛下ニ近侍スル人ニ至ル迄皆ナ曾ツテ王城襲撃ニ多少ノ關係ヲ有スル官吏ノ支配ヲ受ケルニ至レリ

三浦公使ノ謁見終リタル後凡ソ一二時間ヲ經テ左氏ガ尚謁見室ニ接近セル他ノ一室ニ滞留セル際露國代理

公使ウエーバー氏并ニ米國臨時代理公使アレクサンダー氏モ亦参内シ新ニ宮内大臣ニ任命セラレタル李載冕ニ面會シ謁見ヲ請ヒタルニ左氏ハ之ニ對シ陛下ニハ唯今非常ニ震襟ヲ慙マセ玉ヒ居ル際ナレバ謁見ヲ賜ハレ難シト告ゲタリシニウエーバー氏ハ之ニ答ヘ日本公使ノ輿ハ謁見所ノ前ニ置カレアルニ合衆國并ニ露國ノ代表者へ謁見ヲ許サレザルハ何故ナルヤ我其理由ヲ解スル能ハズ

ト去ヒタリシカバ宮内大臣ハ應接所ヲ
出テ暫時協議ヲナシタル後再ビ出テ
来リ兩國公使ニモ謁見ヲ許サルベキ旨
ヲ傳ヘタリ然ルニ兩國公使謁見ノ際陛
下ニハ尚ホ王后陛下ノ殺害セラレタルヲ
知リ玉ハズ之ニ對シ王后ヲ捉ヘ之ヲ殺
害セント企テタル者アリシ趣ナレ氏
王后ハ多分何レヘカ逃レ行キタルナラ
ント信ス尚今後如此暴行ヲ勵ク者
ナキ様御等ニ於テ盡カセラレタシ

云々トノ勅語アリタリ尚ホ他ノ諸
國公使モ亦引續キ今日參内シテ謁見
ヲ許サレタリ

當初本件ニ與セシ者共ノ計畫ニヨレ
バ王城襲撃ニ関スル一切ノ責ハ之ヲ
朝鮮人ニ歸シ日本人ハ全ク之ニ加担
セザルカノ如ク裝ヒ日本人ハ王城内ニ
於テ騷擾ノ起リタル後始メテ城内
ニ入り之ヲ鎮定シタリト揚言スル積
リナリシハ明白ニシテ十月九日付ヲ

外務省

以テ三浦公使ヨリ朝野外部大臣ニ
宛テタル公文中八日早朝國王陛下
ハ勅使ヲ公使館ニ遣ハシ騷動ヲ鎮
定スル為メ参内スベシトノ勅旨ヲ
傳ヘラレタリト記載シタル后
更ラニ語ヲ継テ曰ク「本官ハ勅旨ヲ
聞キ直ニ参内セシモ我守備隊ハ
騷動ヲ鎮定スルガ為メ已ニ入城シ
其結果トシテ騷動ハ直ニ鎮定
セリ今回騷動ノ原因ハ訓練隊ノ兵

卒等王城ニ入り何事カ哀願ニル
處アラントセシラ侍衛隊及巡檢等
ニ於テ之ヲ拒ミシヨリ起リタルモノ
ノ如ク思ハルト翌日三浦子ハ
外務大臣ニ宛テ尚一ノ書簡ヲ送
リ其全文左ノ如シ

以書東致殿上候隙ハ一昨日軍隊
騷擾事件ノ原因ニ付御辨明ノ
貴案ニ對シテハ曩キニ回答ヲ
差進置キ候得共尚其后傳聞

外務省

スル所ニヨレバ本月八日訓練隊兵卒等哀訴スル所アリ突然宮闕ニ進入致候節多ク日本人平服ヲ着シ其中ニ混入シ宮闕内ニ於テ共ニ乱暴ヲ働キタリト噂有之候處本官ニ於テハ是レ全ク事實無根ナル義ト推察致候得共事稍重大ナルヲ以テ決シテ聞流ニ難致義ニ有之候然ルニ聞下ニ於テハ已ニ該件ノ真事實ヲ御義知ノ事ト存候

外務省

處前記ノ噂ハ果シテ事實ニ相違無之候哉否哉至急御回答ヲ煩ハシ度此段照會得貴意候致具

其后二日ヲ經テ朝鮮ノ外務大臣ハ前記三浦氏ノ照會ニ對シ左記ノ回答ヲ送レリ

以書柬致啟上候隙ハ御照會(茲ニ前文ヲ記載ス)ノ趣ヲ義致候付テハ本件ニ關スル一切ノ情況ヲ詳細ニ取調ヘシムル為メ之ヲ軍部大臣ニ

外務省

移謀致候處今回左大臣ヨリ左ノ通
リ回答有之候

該大隊ハ當日拂曉言闕ニ入り哀訴
ヲナサントスルニ當リ若シ侍衛隊ニ
遭遇スルトキハ混雜ノ際必ズ之ト衝
突ヲ生ズルノ畏レアリシヨ以テ之ト
聲ヲ交ニルノ不幸ヲ避ケル為メ外
國人ノ張蓋ヲ為シ且ツ其重立タル
者ハ軍人ノ如ク見エザラシムルガ為
メ日本服ヲ着用セシメタルニ日本

人ハ實際一人ニ混入セシ者無之該大
大隊ガ衝突ヲ避ケル為メ一時此處迄
ヨ同ニタルハ疑ナキ事實ニ有之候間
右様御義知相成度候也

承官ニ於テハ之レニ對シ前記ノ情況
委細義知ノ趣回答致置候間閣下ニ於
テモ亦等シク之ヲ御義知相成度此段
回答得貴意候敬具

千八百九十五年十月十二日

茲ニ注意スベキハ外務大臣ノ書索ハ軍

部大臣趙義淵ノ報告ニ基キタルモノニシテ
全氏ハ前ニモ述ヘシ如ク王后殺害ノ日直
チニ軍部大臣ニ任命セラレシ人ニシテ三
浦公使ノ用ニ供スル為メ斯クモ事實ニ齟
齬シ斯クモ自國軍隊ニ不利益ニシテ斯
クモ全ク日本人ヲシテ其事件ニ關係シ
タル責任ヲ免レシムルノ報告ヲナシタル
ハ是レ則チ全氏ガ此事變ニ關與セシ
コトノ明証ナリ前ニ記載セル廣島裁判
所ノ判決文ハ明ニ記載シテ去ク三浦公

使ハ十月六日被告杉村清岡本柳之助ト
公使館ニ會シ三名謀議ノ上常ニ宮中ノ
為メニ忌マレ自ラ危ム處ノ訓練隊ト
時勢ヲ慷慨スル壯年輩ヲ利用シ暗ニ我
京城ノ守備隊ヲモ之ニ聲援セシメ以テ大
院君ノ入闕ヲ助ケ其機ニ乘シテ宮中ニ
在テ暴モ勢カヲ擅ニスル王后陛下ヲ殫
サント決意シタリ去ル

談判決書中又々記シテ曰ク十月七日三
浦子ハ京城守備隊ノ大隊長馬屋原務

本ニ訓隸隊ヲ操縦シ且守備隊ヲシテ之
ニ聲援セシメ大院君ノ入闕ヲ容易ナラシ
ムベキ諸般ノ指揮ヲ命シ又被告安達謙
藏國友重章ヲ公使館ニ招致シ其知人ヲ
糾合シテ龍山ニ柳之助ト會シ共ニ大院君
入闕ノ護衛ヲ為スベキ事ヲ委囑シ且
當國二十年来ノ禍根ヲ絶ツハ實ニ此一舉
ニアリトノ決意ヲ示シ入闕ノ際王后陛下
ヲ殺害スベキ旨ヲ教唆シ被告秋原秀
次郎ニハ部下ノ巡查ヲ引率シ龍山ニ至リ

柳之助ト協議シ大院君ノ入闕ニ付盡力
スベキ旨ヲ命シ去々ト
該判決書ニハ日本兵壯士及其他ノ人々曉ニ
糸シ王城ニ入りタルコトヲ記載セルニモ
拘ハラズ朝鮮軍部大臣ハ騷動ノ當時日本人
ハ實際一名モ加ハリ居ラザリシト云ヘリ
三浦子ガ此書索ヲ以テ如何ニ利用セシカハ
判然セサレ氏其目的ハ言ハズシテ明カナリ
本件顛末ノ一部トシテ本官ハ茲ニ井上伯
ガ嘗テ京城駐在公使タリシ時日本政府ニ

具申シタル書東ノ摘要ヲ記載スヘシ此摘要ハ過日日本ノ國會ニ於テ朗讀セラレ新聞紙ノ上ニ掲載セラレタルモノナリ井上伯ハ王后陛下ニ謁見ノ事ニ関シ上申シテ曰ク昨年王宮ノ變乱ニ及シテハ意外ニモ日本兵ハ嘗テ初發ヨリ日本ヲ敵視シタル大院君ヲ擁シテ王宮ニ至リ再ヒ政權ヲ執リ大君主ハ虚位ヲ保ツニ至レリ其後貴公使ノ盡カニヨリ大院君ハ政權ヲ離レ舊體ニ復セラレタリト雖モ專ラ官制

ヲ制定シ之レニ依テ内閣ヲ組織シタルニ及ンデハ内閣ノ権力ハ常ニ君主ヲ壓制シ凡百ノ政務ハ内閣專權ト一變シ只其奏聞ニ從ツテ裁可ヲ與ヘザルヲ得ザルニ至リタルハ實ニ此頃迄ノ有様ナリキ要スルニ日本ト相提推考セントシタル閔氏ハ却テ日本ヨリ斥ケラレ而シテ嘗テ日本ヲ擯斥シタル大院君ハ日本公使ノ為メニ推サレタル如キハ遺憾ノ次第ナリ也ト王妃ノ述ベラレタルニ依リテ

官ハ之レニ向テ一ハ辨明ヲ加ヘ兩陛下ノ御疑惑ヲ解キタル后我 天皇陛下并ニ政府ノ誠意誠心能追朝鮮ノ獨立ヲ鞏固ナラシムルト同時ニ王妃ノ安全ヲ圖ルニアレバ今后王室ニ對シ朝鮮ノ王族臣民ニシテ不軌ヲ圖ルモノアル時ハ日本政府ハ兵力ヲ以テモ王室ヲ保護シテ貴國ノ無事安寧ヲ圖ルベキニ付御安心遊スベシト断言シタル所此一言ハ著シク兩陛下ニ感動ヲ與ヘタル様子ニテ御安心ノ色

外ニ現ハレ候

此謁見後間モナク三浦子ハ井上伯ニ代ハリ後僅カ一月余ニシテ王后陛下ハ殺害ニ遇ヒ玉ヒタリ國王及王后兩陛下ガ日本ニ於テ最モ有名ナル而カモ其多年ノ履歷上世ノ信用ト尊敬ヲ博スルニ足ルベキ井上公使タル者ガ日本ノ皇帝ト政府トヲ代表シテ奏上セル此明確ナル保証ヲ信任シ玉ヒタルハ無理ナラス次第ニシテ兩陛下ハ之レガ為ノ全ク御安心召サレ本件ノ如キ出来事ヲ豫

防スルノ手段ヲ取り玉ハガリシナリ
兩陛下ニ對スル右ノ保証ヲ記載セル書柬ハ
公使館ノ記録中ニ存在シ三浦公使ハ之ヲ閱
讀シタルハ疑ナケレ氏左公使ガ其有名ナル
先任公使ノ政略ニ全ク違背シ其約束ヲ履
行スルコトナカリシハ廣島裁判ノ判決書ニ
ヨリテ充分明瞭ナリ
前ニモ記載セシ如ク王宮内ニ於ケル人ハ襲
撃ノ始マル前已ニ警報ヲ得テ將ニ事變ノ
起ラントスルヲ知レリ然ルニ兩陛下ガ當ツテ

卑賤ノ位置ヨリ擢デテ之ヲ寵用シ十分ノ
御信任ヲ置キ玉ヒシ當時ノ農商工部協辦
鄭秉夏ハ十月七日ノ夜ヨリ八月ノ朝ニ掛ケ
宮中御側近ク伺候シ居リシガ左人コソハ則
ハテ逆徒ノ一人ニシテ王后殺害ノ陰謀ニ與
ミシ其宮中ニ伺候シタルハ全ク王后陛下ノ
御舉動ニ注意シ陛下ノ逃レ落チ玉ハガル
様取計ヲ為メナリシコトハ充分ナル証跡
アリ其警報已ニ傳ハリタル後尙未ダ暴徒
等ガ王城ニ乱入セザル時ニ當リ鄭秉夏ハ王

后陛下ノ御前ニ罷出テ臣事ノ由ヲ表知セリ
日本兵直チニ入城シテ陛下ヲ護衛シ奉ルベ
キニ付決シテ御宸襟ヲ慳マシ玉フニ及バスト
奏上セリ然ルニ陛下ハ前ニモ述べシ如ク井上
伯ノ如キ有名ニシテ正直ナル官吏ノ保証アリシ
以テ容易ニ如此逆徒ノ言ヲ聞入レ玉ヒ遁レ
落チ玉フコトノ出来得ベキ機會アリシニモ
拘ラズ御安心アリテ遁レ落チ玉ハザリシモノ
ト推測スルモ不可ナカルベシ
而シテ陛下ハ御不幸ニモ其御居間ニ止マリ玉ヒ

シヲ以テ終ニ全ク之ヲ取圍マレ其出口ヲ
失ヒ玉ハレタリ右鄭兼夏ハ己ニ二月十一日ヲ
以テ逮捕セラレ當日混乱ノ際殺害セラレ
タリ

八月ノ朝國王陛下ハ一切ノ國務ヲ内閣ニ委託ス
ルノ詔勅ニ御記名アラセラレタルト同時ニ
内閣ハ何事モ皆自ラ之ヲ處理シ而シテ三浦公
使ハ其後暫時ノ間内閣ノ舉動ヲ一々表知シ
且ツ之ヲ左右スルコトヲ得タリシガ十月十一日
官報ハ王后陛下ニ関シ左ノ通り詔勅ヲ發

如
雅
雀

表
セリ

朕ノ臨御スル茲ニ二十年治化漸ク普及
セントスルモ王后関氏其親黨ヲ援引
シ朕ノ左右ニ布實シテ朕ノ聰明ヲ壅
蔽シ人民ヲ剝奪シテ朕ノ政令ヲ濁乱
シ官爵ヲ濫賞シテ貪逆地方ニ普ク
盜賊ヲシテ四起セシメタリ
宗社ハ宥カサトシテ危殆ナリ朕其惡ノ
極ナルヲ知テ之ヲ討セザルハ朕ノ不明
ナリ然レモ亦其黨與ヲ顧忌シテ之ヲ

制靡スル為メ昨年十二月宗廟ニ誓告シ
テ后殯宗戚ノ國政ニ干渉スルヲ許サズ以
テ関氏ノ改悟ヲ冀ヘリ然レニ関氏尚舊
惡ヲ後ノズ潛ニ其黨與及群小輩ヲ相引
進シ朕動靜ヲ察シテ國務大臣ノ引接
ヲ防遏シ又朕ノ國兵ヲ解散シテ朕ノ
背ヲ矯メ乱ヲ激起シテ事變ノ出ツ
ルヤ壬午ノ往事ヲ蹈襲シ朕ヲ離
レテ其身ヲ避ケタリ朕之ヲ訪求スル
モ出現セス是レ王后ノ徳ニ稱ハズ其罪

卜
務
旨

恩貫及盛セルナリ

先王ノ宗廟ヲ受クル朕ハ己ムヲ得ズ
朕ガ家ノ故事ニ謹做シ王后閔氏ヲ廢
シテ庶人トナス

開國五百四年八月二十日奉

勅

宮内府大臣	李載冕
内閣總理大臣	金宏集
外部大臣	金允植
内部大臣	朴定陽

度支部大臣	沈相薰
軍部大臣	趙義淵
法部大臣	徐光範
學部大臣臨時署理	徐光範
農商部大臣署理	鄭兼夏

此忌ルシキ事柄ハ之ヲ記載スルスラ
本官ノ快トセザル所ナレ且之ヲ起載セ
ザレバ此報告書ノ完備セザルヲ如何セ
シ詠詔勅ハ全ク偽詔ニシテ何人モ陛
下ノ意ニ出テタリト信スルモノナシ而

卜務省

外務省

シテ右ハ全内閣員ノ副署アリシト稱スル
モ度支部大臣沈相薰ハ當時已ニ内閣ヲ
去リ京城外ニ遁去セシ後ナレバ此事件
ニ関スベキ筈ナク内部大臣朴定陽ハ此
兇悪ナル事柄ニ関與スルヲ拒ミ詔勅ニ
副署セズシテ其官職ヲ辞シタリ

此ノ如キ詔勅ヲ發シタルハ則ハチ當時ノ
内閣ヲ支配セシ人ルガ如何ニ非常ナル惡
計ヲ廻ラシ又如何ナル程度迄賢明善良
ナル王后陛下ニ對シ奉リ少シモ形跡ナキ

冤罪ヲ蒙ラシメ且ツ其殘酷ナル御最後
ニ関スル事實ヲ捏造セント計畫セシカラ
察スルニ足ルベシ

彼等ハ多クノ冤罪ヲ擬シテ王后ヲ誹譏
シ王后ハ國王陛下ノ國兵ヲ解散シテ其
旨ヲ矯メ乱ヲ激起シテ事變ノ出ツル
ヤ陛下ヲ離レテ其身ヲ避ケ之ヲ訪求ス
レ氏出現セザリシヨリ彼等ハ之ヲ以テ王
后ノ德ニ稱ハザルノミナラズ其罪惡貫
盈セリト為シ其位ヲ廢シ庶人ト為シタ

リ去レ氏王后ハ其實逃レ落キ玉ヒシニハ
アラバシテ已ニ殺害サレ他所ニ潛ミ玉フニ
非ズシテ御遺骸ノ已ニ燒棄テラレシコトハ此
等ノ人々ノ熟知スル所ナリシナリ

内閣ハ十一日ヲ以テ京城駐在各國公使ニ宛テ
公文ヲ送り右詔勅ノ全文ヲ掲ケ且ツ國王
陛下ハ此度王室ノ為メ又人民ノ幸福ヲ畱
リ玉フ為メ詔勅ニ記載シタル通り御處分
アリタル旨ヲ附記セリ翌日三浦公使ハ此回
文ニ對シ外部ニ向ツテ左ノ如ク回答セリ

以書東致啟上候陳ハ本月十一日付第二十
一號貴柬ヲ以テ此度大君主陛下ニ王后
閔氏ノ不徳ナルニヨリ貶シテ庶人ト為シ玉
ヒシ趣御通報相成候處右ハ本官ニ於テ誠
ニ驚駭ノ至リニ堪ヘス候畢竟大君主陛下
ニ於テ王室ノ為メ民福ノ為メ篤ト御熟
考ノ上如此御決定相成リタル次第ト存候
得共斯ル不幸ナル事ノ起リタルハ貴國
ノ為メ本官ノ甚ダ遺憾ニ存スル所ニ
御座候御通報ノ趣ハ本官ヨリ早速電

報ヲ以テ本國政府ニ報告致置候云々

千八百九十五年十月十二日

合衆國ノ代表者アレシ氏ハ左ノ簡單ナル語ヲ以テ之ニ答ヘタリ

本官ハ此詔勅ガ陛下ノ睿慮ニ出テタルモ、ト認定スルコト能ハスト

而シテ他ノ諸國公使モ亦一名ヲ除ク外皆外部大臣ニ向ツテ之ト同様ナル回答ヲ送レリ其後凡ソ十日ヲ經テ日本政府ハ八日亭變ノ詳細ヲ聞知シ三浦公使杉村書記官

數多ノ陸軍士官及ヒ其他ヲ召還シ其帰國スルヤ直チニ之ヲ逮捕セリ朝鮮ノ武官二名ハ遁逃シタリシモ内閣ハ引續キ國務ヲ處理シ國王陛下ヨリ一切権力ヲ奪取リタリ

此内閣ガ發布シタル諸般ノ詔勅ト其施設トハ大ニ不満ヲ惹起シ一般ノ朝鮮人ヲ始メ諸外國ノ代表者モ亦書面ヲ以テ八日亭變ヲ取調べ且ツ王后殺害者ニ對シ審問ヲ行フベキ旨ヲ迫リタレ氏内閣ニ於テハ

少シモ之ヲ實行スルノ模様ナク王后ハ尚遁
 逃シテ潜伏シ玉ヘリト稱シ居レリ然レ氏事
 情ハ次第ニ切迫シ内閣ニ於テモ到底其儘
 之ヲ放置ス可カラザルコトヲ覺リシカバ千八
 百九十五年十一月二十六日各國公使及其他
 多クノ外國人ヲ宮城ニ迎ヘ國王陛下ノ面
 前ニ於テ軍部大臣趙義淵及警務使權官
 ヲ免シタルコトヲ告知シ王后ヲ貶スル詔勅
 ヲ取消シ最初ヨリ無効ナルモノナリトシ
 王城攻撃ニ関スル事實ハ法部ニ於テ之ヲ

調査シ犯罪者ハ悉ク逮捕審問處罰スベ
 キ趣キヲ告ケ且ツ同時ニ王后陛下ノ崩御
 ヲ公然發表セリ
 右ノ處置ハ一般ノ不滿ヲ慰スルニ足ルベシト恩
 ハレシモ彼等ハ他ニ何等ノ處分ヲ行ハザル
 ノミナラズ兇惡ノ徒尚内閣ニ殘留シ國
 王陛下ヲ囚擄スルノ實アルヲ以テ或ル
 朝鮮人等共ニ相計リ十一月二十八日拂
 曉ヲ以テ王宮ニ進入シ陛下ニ忠節ヲ盡
 ス為メ王權ヲ恢復セントシタレ氏不幸

ニシテ其方法ヲ誤リテ終ニ失敗セリ其
時多數ノ人々喧噪シテ王城ノ諸門及
城壁外ニ群集シタレ氏宮庭内ニハ一名
モ侵入シタルモノナク僅カノ人々宮闕ノ
後部ニ於ケル科擧場迄入り込ミタレ氏
彼等ハ直チニ追ヒ散サレ其他数名ハ遠
捕サレタリ該件ニ関シテハ一名ノ負傷者
ナク且ツ日本人並ニ西洋人ハ一切之ニ関
係セシ証跡ナク右ハ十月八日ノ事變
ニ比シ全ク些細ナル事ニ過キガリシナ

外務省

リ
然ルニ内閣ハ此事變ヲ以テ甚ダ重大ナ
ルガ如ク視做シ之ニ關係セシ嫌疑ヲ以テ
數多ノ人ヲ捕縛スルト同時ニ王后殺害
事件ニ關係ノ嫌疑ヲ以テ三人ヲ捕縛セリ
内閣殊ニ法部ニ於テハ十月八日事件ヲ十
分ニ取調ベ真正ノ犯人ヲ四罰スルノ意ナ
キハ勿論ナリシモ全ク之ヲ放任スルコト
ヲ得ザルノ事情アリ特ニ第二回ノ王城攻
撃即チ内閣自身ニ對スル攻撃ニ関シテ

小務省

ハ其犯人ヲ處罰セント欲シタルガ故ニ
前回ノ分ヲ全ク等閑ニ附シ能ハザリシナリ
王后殺害ノ故ヲ以テ逮捕サレタル三人
ハ何レモ處罰サレタレ凡内二人ハ全ク無罪
ナリシコトハ明白ナリ

前記三名ノ内一名ハ朴銑ト稱スル少年
ニシテ王后殺害ノ嫌疑ヲ以テ逮捕サレ
シ當時已ニ他ノ罪科ニヨリ獄中ニ囚ハレ
居リシガ法部ノ或ル高等官吏監獄署
ニ至リ在監者ニ面會ヲ求メ數多ノ囚徒

ヲ點檢シタル後朴銑ヲ撰出セリ左官吏
ハ則チ二月十一日後何レヘカ逃亡セシ者
ニシテ其監獄署ニ至リタルハ王后殺害ノ
罪ヲ蒙ラシムルニ適當ナル囚人ヲ撰出ス
ルノ目的ニ外ナラザリシヲ察スベシ然ル
ニ彼等ハ尚王后ヲ殺害シタルハ日本人ノ
装ヲナシタル朝鮮人ノ所業ナリト揚
言シ居リシ際ナリシニ恰モ良シ朴銑
ナル者ハ釜山ノ人ニシテ多ク日本人ト
交リ日本語ヲ話シ散髪トナリテ平

素日奉服又ハ洋服ヲ着用セシ者ナレバ
正ニ其目的ニ適ヒタルモノナリ同人ハ
朋友ナキ無責任ノ醉漢ナリシガ如ク其王
后ヲ殺害セリト断定サレタル証憑ヲ換
スルニ全ク一婦人ノ言ニ基クモノニシテ左
婦ハ昨年十一月中或ル朝鮮人ヨリ取立ツ
ベキ貸金アリシニ或人之ニ勸ムルニ日本人
ト懇意ナル者ニ頼ミ之ヲ請求セバ如何ト
テ朴銑ヲ連レ来リシガ朴銑ハ同婦ニ向ヒ
予ハ何時ニテモ日本兵五十名ト日本巡查

五十名ヲ伴ヒ来リ其貸金ヲ取立テ遣
ハスベシト告ゲタリ其後左人ハ果シテ左
婦ノ為ノ貸金ノ幾分ヲ取立テ来リシモ
兵卒巡查等ノ助カラ借リシニアラザル
ハ勿論ナリ然ルニ左人ハ其取立タル六十
貫文ノ半額ヲ強請シテ之ヲ領収シタル
後尚醉ニ乘シテ左婦ノ家ニ至リ殘額ヲ強
請シ刀ヲ抜き左婦ヲ脅嚇シテ去ハク
余ハ豪傑ノ士ニシテ數多ノ人ルヲ殺
害シ汝が如キ者ニ比シ百陪モ高貴ナル

婦女ヲ殺害セシ者ナレバ今若シ余ニ金
錢ヲ渡サバレバ汝モ亦一刀ノ下ニ斬リ殺
スベシト迫リ又夕十月七日ノ夜自ラ大
院君ノ邸ニ至リ國事ヲ談シ之ニ其計ヲ
授ケタル後翌朝王城ノ門前ニ至リ刀ヲ以テ
洪啟薰ヲ斬殺シ(洪ハ其實鏡殺サレタル
ナリ)タル上王城ニ入り王后ヲ捕ヘテ直ニ
之ヲ殺害シ其遺骸ヲ燒棄テタル由ヲ
語リタリト云フ彼ハ左婦ヨリ金錢ヲ強
奪スル為メ實際或ハ如此妄談ヲナシタル

カナレ氏右ハ苟モ司法官タル者ノ決シ
テ信用スベキ話シニ非ズ法部ニ於テモ之ヲ
信用セガリシヤ明カナリ朴鏡ノ口供ニヨレ
バ左人ハ決シテ斯カル事ヲ話シタル覺ナ
シト主張シ十月七日ノ夜彼ハ醜斷ノ上王
城ヨリ遠ク隔リタル家ニ宿泊シ翌朝王
城ニ鏡聲起リ人々之ヲ聞キ起キ出テ夕
ル時ニモ尚左家ニアリ其日ハ夕刻迄談所
ニ止リ居リシ由ニテ彼ハ其家ノ人々ヲ名
指シ之ヲ取調べンコトヲ請ヘリ依ツテ之ヲ

呼出シ審問セシニ其申立ハ左人が當日王
城ニ行キタル筈ナキ旨ヲ申立テタリシ
が左人ハ前以テ彼等ニ通信スルノ途ナカ
リシ故其間ニ申合セヲ為シタル疑ハ少シ
モナカリシナリ然ルニ朴銑が王后陛下
ヲ殺害セル犯罪ニ関係ナキコト如此明
白トナルヤ當時本件ヲ審問セシ掛リ判
事ハ法部大臣張博ニ白ツテ左人ノ無罪
ナルヲ告ケタルモ張ハ其罪ヲ白状スル迄
之ヲ拷掠スベシト命シタリ左判事ノ言

フ所ニヨレバ其時若シ張ノ命令通り拷
掠ヲ加ヘタランニハ被告人ハ之ガ為メ終
ニ死亡セシナラン左人ハ殘虐ナル拷問ヲ
受クルコト確カニ前後二回ニ及ヒタルモ常
ニ其無罪ヲ主張シ終ニ一ノ罪科ヲモ白状
セシムルコト能ハザリシニ拘ハラヌ被告
ハ洪啟薰ヲ殺害シタル后王城ニ乱入シ
王后陛下ヲ殺害シ遺骸ヲ燒キ捨テタ
ル者ナリトノ判決ヲ下サレタリ
尹錫禹ノ件ハ尚之ヨリ一層甚シク裁判

所ハ唯被告ノ口供ヲ取リタルノ外別ニ
証憑ヲ蒐集セルコトナク而シテ其口供ニヨ
レバ毫モ犯罪ノ廉ナキコト明白ナリ彼
ハ訓練隊ノ副尉ニシテ八日拂曉前例ノ
如ク夜演習ヲ行フニ付部下ノ兵ヲ率
ヒテ兵舎ヲ出テ王城ノ背後ニ於ケル或
場所ニ集合スベキ旨ヲ其大隊長ヨリ
傳ヘラレタルニ付彼ハ其命ニ從ヒ日本
ノ陸軍教官モ亦之ニ隨行セリ暫クアツ
テ門扉ノ開ケタル頃大隊長ノ一人(其

後逃セセシ人ナリ)ハ彼ニ命シ科擧場ヲ
經テ王宮内ニ其兵ヲ引入レシメタリ
彼等ガ王城内ニ到着セシハ已ニ騷擾
ノ終リシ頃ニシテ彼ハ王城内ニ於ケル諸
門ニ守兵ヲ配置スベシト命セラレ之ヲ
實施スル為メ憲兵巡行中一ノ死骸ガ
燒棄テアルヲ認メタルニヨリ之ヲ尋
ネタルニ右ハ宮女ノ死骸ナリトノコト
ナリシガ翌日夕刻大隊長禹範善ニ
向ヒ國王陛下御居殿ノ間近ニ當リ死骸

ノ燒棄テアルモノアリ如ク陛下ノ御居
殿ニ接近シタル場所ニ死骸ヲ置クハ甚
ダ不都合ナリト云ヒシニ大隊長ハ然バ
善ク其場所ヲ取方附ケ若シ尚遺骨ノ
燒残リアラバ附近ノ池中ニ投スベシト
余シタリ此大隊長ハ己ニ世人ノ知レル如
ク陰謀者ノ一人ニシテ目下逃亡中ノ
者ナリ依ツテ尹錫勳ハ再ビ左處ニ到リ
シニ尚殘骨アルヲ發見シタレ凡大隊
長ノ命シタルガ如ク之ヲ池中ニ投ズル

コトナク却ツテ敬シク之ヲ拾ヒ上ケ包
ニ取リテ王城内ノ遠隔セル場所ニ持運
ビ之ヲ埋メタリ彼ガ審問廷ニ於テ申立
ツル所ニヨレバ當日王后陛下ノ御所在不
明ナリトハ聞及ビタルモ右ハ唯王宮ニ關
係セル或ル貴婦人ノ骨ナルヲ知り之ヲ池中
ニ投ズルニ忍ビガリシト云ヘリ然ルニ法
部大臣張博ハ右ノ陳述ヲ證據トシテ彼
ニ有罪ノ宣告ヲナシ之ヲ死刑ニ處シタ
リ張ガ下シタル判決書ノ末文左ノ如シ

被告ノ所為甚タ怪ムベキ廉多キノ
ミナラズ王后陛下ノ死骸ト知リツ、
之ヲ他ニ持運ヒタルハ甚ダ其當ヲ得
ザルモノナリ云々

前記ノ次第ニヨリ左人が死刑ニ處セ
ラレタルハ唯王后陛下ノ御遺骨ヲ動
カシタルカ故ニアラスシテ其惡逆ナ
ル大隊長ノ命ニ背キ之ヲ池中ニ放投
セスシテ却ツテ敬シク埋葬シタルカ
故ナリト推測スルモ敢テ不當ニ非ザル

ベシ其訊問ヲ受ケタル問題ヲ換スルニ
彼ハ御遺骨ヲ西洋人等ニ示シ以テ其兇
惡無道ナル犯罪ヲ發ク為メ之ヲ陰匿ス
ルナラントノ嫌疑ヲ受ケ居リタルモノト
知ラレタリ陸軍武官中ニハ實際十月八
日事變ニ關係セシ逆徒ニシテ當時ノ内
閣ガ之ヲ熟知セシ者アリシト雖モ尹
錫島ハ全ク無罪ナリシコト明白ナリ
次ニ有罪ノ宣告ヲ受ケタル者ハ前軍部
協辦李周會ニシテ今回新ニ取調べタル

証憑ニヨレバ左人ハ實際十月八日事變ニ關係セシ犯罪者ナリト認ムベキモ曩ニ左人ニ對シ有罪ノ宣告ヲナシタル裁判官が取調べタル証據ハ一トシテ其犯罪ヲ証明スルニ足ルモノナシ誠裁判官ハ唯被告ノ陳述ヲ聞キタルノミニシテ他ニ証據ヲ求ムルコトナク被告ノ言フ所ニヨレバ彼が王城ニ入りタルハ全ク國家ノ為メニシテ王城内ニ於テ種々ノ功業ヲ立テタルニ過キス元來本件ノ顛末ハ

内閣ノ人々ニ於テ之ヲ熟知シ鄭兼夏ノ如キハ其一人ナリトテ彼ハ之ヲ名指シタリ内閣ガ孝周會ヲ有罪者ト撰定シタルハ其有罪ナルガ故ニ非ズ若有罪者ヲ處罰スルノ意ナレバ他ニ左人ヨリ一層深ク本件ニ關與セシ者アレ氏右ハ畢竟第一ニハ彼軍務協辦タリト雖モ内閣負ハ平素彼ト睦ジカラズ彼等ハ深ク左人ヲ憎ミ又タ他日左人ノ為メニ其陰謀ヲ發カレンコトヲ畏レ居リタルト第二ニハ他ノ朴尹兩

外務省

名ノ内一ハ無責人ナル無頼漢ニシテ一ハ唯
副尉ノ官ヲ有スル者ニ過キスシテ共ニ少
モ目立チタル人物ニアラザレバ外見ヲ装
ヒ且ツ他ノ高官ノ罪惡ヲ蔽フ為ノ相當ノ
地位名望ヲ有スル人ヲ有罪トシ之ヲ處刑
スルノ必要ナルヲ認メタルトニ由リタルモ
ノト認ムベキノミ

扱テ前ニ記載セル如ク十月八日王城ヲ襲撃
シ王后ヲ殺害シタル事件ニ関シテハ僅カニ
三名ノ人ヲ逮捕シタルニ過キサリシモ十一

月二十八日ノ事變即チ内閣ニ向テナシタ
ル攻撃ニ関シテハ極メテ些細ノ事件ナリ
シニモ拘ハラズ三十三名ノ嫌疑者ヲ逮捕
セリ右兩件ノ審問ハ尙レモ今時ニ實行シ
十二月下旬ニ至リ之ヲ完結セリ而シテ十月
二十八日事變ニ関シ逮捕セラレタル者ノ内
二名ハ死刑ノ宣告ヲ受ケ四名ハ終身流刑
ニ處セラレ尚四名ハ三年間ノ懲役ニ處セ
ラレ此十名ノ内三名ハ審問中ニ拷掠セラレ
タリ

外務省

李載純モ亦右ノ人ト共ニ有罪ノ宣告ヲ
受ケタリシガ今人ハ國王陛下ノ從兄弟
ニ當リ陛下ニ對シ景モ忠順ニシテ景モ厚
キ御信任アル人ニシテ二月十一日以來宮内
大臣ノ職ヲ奉ル者ナリ其有罪ト認ノラ
レタル証據ヲ案ズルニ十一月上旬林ト名ツ
クル朝鮮人李載純ノ許ニ來訪シ國王ノ詔
勅ナリト稱シニ通ノ書面ヲ示シタルニヨリ
李ハ之ヲ取押ヘ陛下ニ捧呈シケレバ陛下ニ
ハ之レ全ク偽勅ナレバ速ニ燒棄ツベシト

御沙汰アリタリ依ツテ李ハ御沙汰ノ如ク
取計ヒ其後ハ何事ヲモ林ノ言ヲ取合ハサ
リシナリ然ルニ法部大臣張ノ下シタル判
決書ニヨレバ被告李載純ハ密謀ヲ知リ
速ニ之ヲ當該官吏ニ通報セザリシ廉
ヲ以テ三ヶ年間ノ懲役ニ處セラレタリ
即チ之ヲ換言スレバ陛下ノ御近親ニシ
テ其御信任ヲ有スル者陛下ニ奏上シ
書類ヲ睿覽ニ供シ勅旨ニヨリ之ヲ燒キ
棄テ之ヲ内閣ニ引渡サバリシトノ故ヲ

以テ終ニ三ヶ年間ノ懲役ニ處セラレタ
ルナリ

前記事件ノ審問方ハ時々内閣ノ議ニ附
シタルモノナレバ内閣員ハ最終ノ判決
ニ至ル迄裁判所ガ如何ナル事ヲ為シタ
ルカヲ一々兼知セシハ確カナル事實ト
ス

去ル十二月一月及二月上旬中内閣ハ断髮令
及其他種々廣ク關係ヲ及ボスベキ計
画ヲ實行シ其内断髮令ハ最モ著シク

世人ノ激昂ヲ来シ全國到ル處之ガ為ノ
ニ激動シ處々ニ騷乱ヲ惹キ起シタリ其
間國王陛下ハ毫モ政務ヲ統御スル権力ヲ
有シ玉ハズ王城ヲ護衛セル親衛隊ハ李軫
鎬之ヲ指揮シ(左人ハ二月十一日ノ詔勅ニ
ヨリ其罪ヲ曝サレタルモノナリ)左人ハ全ク
内閣ニ隷屬シ何時ニテモ其命スル處ヲ行
ヒシ者ナリ又陛下ノ信任シ玉ヒシ人及
其他陛下ニ忠實ナルベシト認ノラレベキ
者ハ李載純ノ如ク王宮ヨリ放逐セラレ陛

下ハ其仇敵タル内閣ノ瓜牙ニシテ王后殺
害事件ニ直接ノ關係アル人々ニ其左右ヲ
圍マレ玉ヒタリ鄭兼夏ノ如キモ亦其一人
ニシテ全人ハ前ニ述ベタル如ク唯ニ王后
陛下カ難ヲ避ケ玉ハントスルヲ妨ケタルノ
ミナラズ之ヲ貶シテ庶人トナスノ詔勅ヲ
發シタルコトニ付テハ大ニ與テカアル人々
リシガ全人ハ十二月三十日ヲ以テ農商
工部協辦ヨリ進ンテ大臣ニ任命サレタリ
又前ニ記載セル事情ニヨリ一旦其職ヲ免

セラレタル趙義淵ハ一月三十日再ヒ軍部
大臣ノ職ニ復シ一切ノ軍務ヲ統轄シ尚前
キニ警務使ノ職ヲ免セラレ日本ニ滞在
中ナル權滌鎮モ亦再ヒ警務使ニ復セント
スルノ模様アリタリ

又日本廣島裁判所ニ於テハ十月八日ノ王
城事變ニ關係セル日本人ニ對シ判決文中
其罪跡アルヲ認メナガラ無罪放免ヲ言
渡シテ其判決書ヲ公布シ刺ヘ其關係人
中二三ノ者ヲ再ビ朝鮮ニ連レ来リ朝鮮政

府部内ニ於テ樞要ナル顧問官ノ位置ヲ與フ
ベシト公言スル者アルニ至レリ加之人民ハ各
地ニ騷動ヲ起シ憲法ノ官吏ヲ殺害シ將サニ
京城ニ攻押セントスルノ勢ヲ示セシカバ國
王陛下ニハ御一身ノ為ノ國民ノ為ノ痛ク
宸襟ヲ慙マセ玉フ折柄陛下及王太子殿下ノ
御身上ニ関シ由ラシキ陰謀ヲ企ツル者アルヲ
聞シ召サレタルヨリ終ニ二月十一日ヲ以テ御英
断ニヨリ王城ヲ出テサセ玉ヒ露國公使館ニ
臨御アラセラレタリ國王陛下ニハ王城内ニ於

ケル官吏ハ何人ニモ之ヲ知ラセ給ハズ全日
早朝見張ノ嚴密ナルニモ関ハラズ宮女ノ輿
ニ御シ簾ヲ閉テ陰カニ王城ノ東明ヨリ脱ケ
出テ玉ヒ王太子モ亦全様ナル輿ニ乘ジ之ニ隨
行セシガ女官及王宮ニ關係アル婦人ハ從來
如此輿ニ乘シ諷門ヨリ出入スルノ例ナリシ故
番兵等ハ陛下及王太子ノ御セラレタル輿モ
亦婦人ヲ乘セタルナラント思ヒ別段ニ問直
スコトモナク之ヲ通過セシメタリ
國王陛下及王太子ハ一名ノ護衛ヲモ召シ

連レ玉ハザリシガ宮中ノ人ハ尚御睡眠
中ナリト思ヒ暫時ノ間之ニ氣付カザリシ
ナリ斯テ御兩人ハ直キニ露國公使館ニ向
ハセラレ七時二十分頃左館ニ着御セラルヤ
直キニ陛下ニ對シ忠實ナル朝鮮人ヲ召出シ
前内閣員ハ概ネ之ヲ免職シ他ノ人ニテ
之ニ代ユル勅ヲ出シ且ツ十月八月王城襲撃
事件ニ關係セシ軍務大臣趙義淵大隊長
禹範善李斗璜李範求前警務使權濬鎮
及び詔勅ノ當時迄親衛隊ノ指揮官タリシ

李軫鎬等ノ罪惡ヲ表白セリ此内禹範善
李斗璜權濬鎮ノ三名ハ當時已ニ京城ヲ去
リ日本ニ滞在セリト云フ軍部大臣趙義淵及
其他二名ハ直キニ逃亡セリ兵卒巡檢等ハ
事ノ由ヲ聞知スルヤ否ヤ直キニ其士官ト共ニ
總テ陛下ノ御味方ニ隨ヒタリ前内閣ノ總
理大臣金宏集及農商工部大臣鄭秉夏ハ
詔勅ヲ以テ其罪ヲ曝ラサレタルニ非ザルモ
警察官ノ為ノニ逮捕セラレ混雜激昂ノ
際終ニ殺害セラレ其死骸ハ市街ニ曝サレ暴

民等或ハ之ニ石ヲ投シ或ハ其他種々ナル暴
行ヲ加ヘタリ尚一名ノ年若キ日本人他ノ人
々ニ從ヒ右ノ屍骸ヲ見物ニ行キタル際喧嘩
ノ末投石ニ當リ其後問モ無ク死亡シタル外
今日ハ一名モ逮捕又ハ殺害セラレタル者ナク
京城内ハ直チニ平穩無事ノ有様トナレリ
尚前ニ記載セル人々ノ外ニ十月八日事變ニ
關係セル朝鮮人ノ舉動ニ關シ報告スベキ
ハ諛陰謀が果シテ那邊ニ於テ發起セラレ
果シテ何人が之ヲ實行シタルカハ之ヲ廣

島裁判所判決書ニ徴シテ明瞭ナリトス尚モ
如此王后ヲ殺害シ如此國政上ニ根本的ノ害久
更ヲ来スベキ陰謀アルコトヲ發覺シタランニ
ハ之ヲ未發ニ挫折セラル、コトノ容易ナル畏
レアリタルヨリ其密謀ニ與リタル者ハ頗ル
僅少ニシテ尋常ノ朝鮮兵ハ一名モ之ヲ知ル
者ナク其士官ト雖モ数名ヲ除ク外ハ何事
ヲ行ハントスルカ又自ラ何事ニ使用セラル、
カラ知ラザリシモノ、如シ然ルニ兵舎内ニ於
ケル朝鮮兵ノ直接指揮權ヲ有シタル大隊長

禹範善及李斗璜ハ其陰謀ニ加ハリタル者ニシテ彼等ハ八日ノ拂曉前夜演習ノ為ノ兵卒ヲ召集スルノ命ヲ傳ヘタリシガ曾テ一兩度之ト全一ナル命令ヲ傳ヘタルコトアリシニヨリ兵卒等ハ其命ニ從ヒ處ルニ進行シ或部分ニハ日本ノ陸軍教官モ之ニ隨行セリ而シテ其内幾分ハ日本兵ノ先驅ニ從ヒ正門ヨリ王城ニ入り餘ハ其後他ノ諸門ヨリ王城ニ入り込ミタリシガ彼等表ハニ王城護衛ノ任務ニ就カシメラレタ

リ去レ氏彼等ハ一人モ争鬪ニ與リタル者ナク又タ乱暴ヲ行ヒタル証跡ナシ唯暴行ノ勸カレシ宮室ノ前面ニ於ケル廷内ニハ極メテ少数ノ兵卒入り込ミタレ氏其内ニハ日本兵モ混入シ居レリ右ハ朝鮮兵ガ在所ニ入り込ミ居リシトノ口實ヲ作ランガ為メ故ラニ連レ行キタルモノト推測セラレタリ後ニ至リテ朝鮮兵陛下ノ御前ニ哀訴スル為メ王城ニ入り彼等ノ多クハ日本人ノ服装ヲ為シタリ

古ハト頻リニ言傳ヘラレタルモ右ハ全ク靈
構ノ説ナリトス朝鮮兵モ亦日本兵ノ如ク
嚴格ナル軍紀ノ下ニ在リ其日本兵ト共
ニ王城ニ進入セシハ日本兵ト均シク唯
其上官ノ余令ニ從ヒシニ過ギザリシナ
リ
文官モ亦本件ノ陰謀ニ與ミシ内数名ハ
高等ノ位置ヲ有シタル者アリ彼等ノ
多クハ取調上不幸ニモ已ニ逃亡シテ目
下外國ニ滯在中ナリ本官ハ彼等ノ所

業ニ関シ目下充分ニ調査中ナレバ追ッテ
具報スル所アルベシ

前記ノ報告書ハ王城内ニ於テ行ハレタル暴
行ヲ遺漏ナク記載シ盡シタルモノニ非ズ
平服ヲ着シ刀劍又ハ短銃ヲ携ヘ直接ニ
乱暴ヲ働キタル日本人ノ内ニハ尋常ノ
壯士ニアラザル人々モ多ク朝鮮政府ノ顧
問官ニシテ該政府ヨリ俸給ヲ受ケ居リタ
ル者アリ又日本公使館附巡查モ其中ニ
加ハリ居リシガ如シ此等ノ人々ヲ壯士ト合

算スルトキハ當時王城ニ乱入セシ日本人
ハ兵卒ヲ除キ其数凡ソ六十名ニ及ベリ

印

高等裁判所

夕
子
省

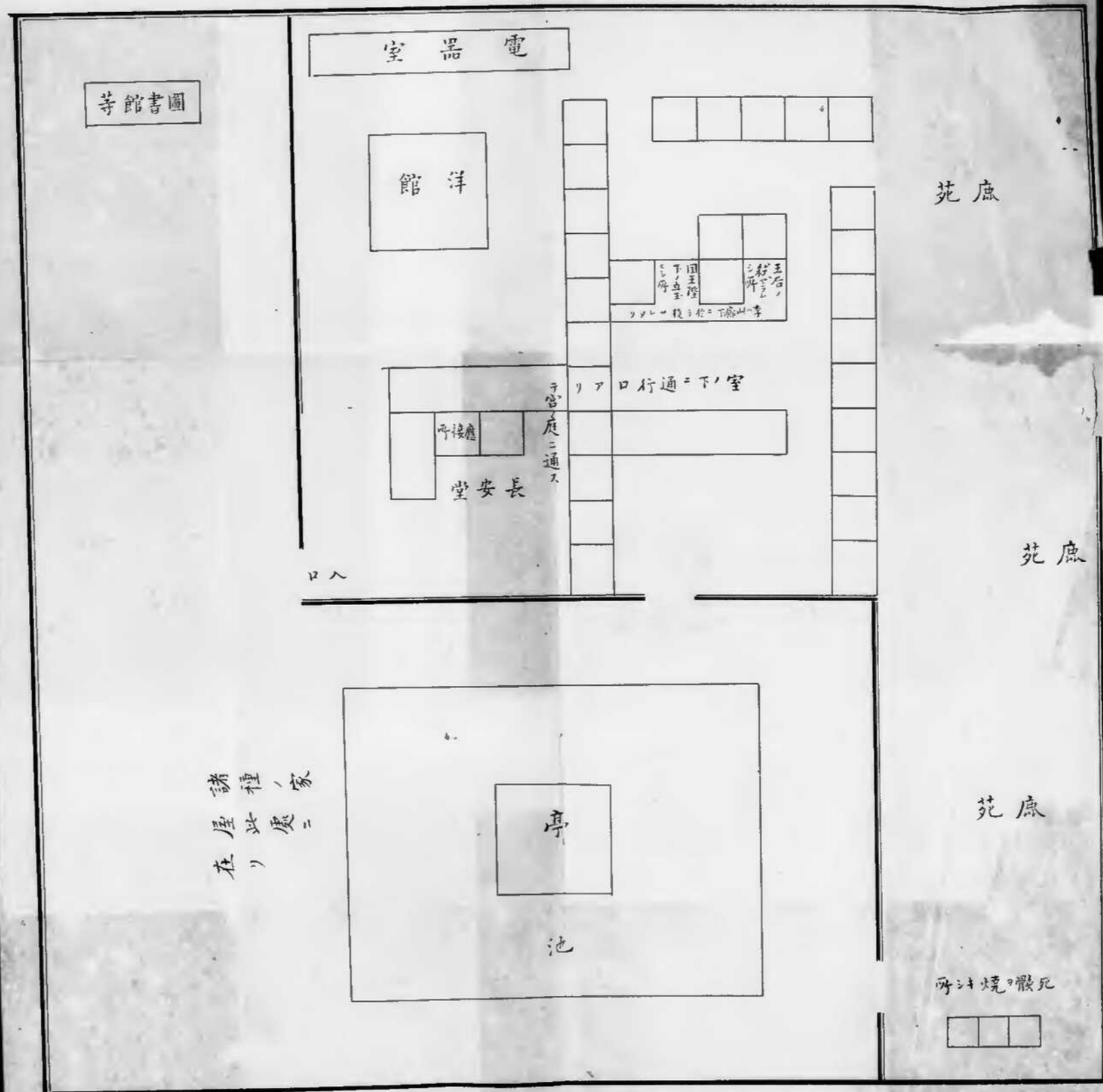
死骸ヲ燒キ所



池

本圖ハ宮中殿后ノ死ニ関テ報告書ニ記載タル部

リナ尺英六十カ高ノ壁ヲナ場舉科ハ北ノ壁此



等館書圖

室器電

館洋

苑底

國王陛下御下ノ御座

リア口行通=下ノ室

長安堂

苑底

諸種ノ家屋此處ニ在リ

亭
池

苑底

所ナ焼ノ殿死

ス示ヲミノ分部ルヲシ載記ニ書告報ニ開死治王中殿宮ノ圖本

送第二七〇號

昨二十八年十月八日朝鮮國京城ニ於ケル事變ニ關
シ今回法部協辦ヨリ法部大臣へ提出シタル公報ナリト
稱シ去ル三月中刊行ニ係ル「ゼ・コーレアン・レポジット」
雜誌所載ノ件ニ付在京城内田一等領事ヨリノ報告
別紙ノ通上奏致候間可然御取計相成度此旨申
進候也

明治廿九年五月十五日

外務大臣伯爵陸奥宗光



内閣総理大臣侯爵伊藤博文殿

外務省



外務大臣上奏横濱駐在和蘭國
副領事イ、ゲ、リ、フ、ア、ン、ウ、ア、ル、レ、ー、へ御
認可状御下付ノ件

右謹テ奏ス

明治二十九年五月二十日

内閣總理大臣侯爵伊藤博文



伊藤

印

夕

利

省